

## もくじ

▽大会案内	1
▽国際会議レポート	2
▽受賞者のことば	3
▽イベント報告	4
▽学会動静	5
▽ from Editors	7

### 【大会案内】

#### 第 73 回大会のご案内

大会長 岡田 明  
大阪市立大学

第 73 回大会は、大阪市立大学にて下記の要領で開催いたします。

本学の大会実行委員会の教職員の多くが生活科学研究科にて研究教育を行っていることから、今回の大会では「生活の中の生理人類学」をメインテーマに企画づくりを進めております。

まず特別講演では、今後の生活の中で問われる人間とロボットとの共存を考えることに焦点をあて、「人間とは何か」という基本問題と向き合いながら人間型ロボットの研究開発を行っている大阪大学の石黒 浩教授をお招きすることになりました。またシンポジウムでは、「生活科学と生理人類学」をテーマに現在企画中です。

多くの皆さまのご参加を心よりお待ちしております。詳細につきましては、学会ホームページなどで随時お知らせする予定です。たくさんの会員の皆様と大阪でお目にかかれることを心より楽しみにいたしております。ぜひ、ふるってご参加くださいますようお願い申し上げます。

#### □■□ 大会概要 □■□

1. 会期：2015 年 6 月 4 日（土）・5 日（日）（理事會および若手の会は 6 月 3 日（金）を予定しております）
2. 会場：大阪市立大学杉本キャンパス 学術情報総合センター  
〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138  
<http://www.osaka-cu.ac.jp>

（天王寺から JR 阪和線各駅停車で約 15 分、杉本町駅下車徒歩 5 分）

#### 3. スケジュール（予定\*）

##### 6 月 4 日（土）

午前：一般発表①（口頭、ポスター）

昼休：評議員会

午後：一般発表②，特別講演 テーマ「人間とロボット（仮）」講師：石黒 浩（大阪大学教授）

夕刻：懇親会

##### 6 月 5 日（日）

午前：一般発表③

昼休：総会，各種委員会

午後：シンポジウム 「生活科学と生理人類（仮）」（企画中），一般発表④

会期中：機器展示

（\* 各プログラムの時間については変更の可能性あり）

4. 参加・発表申し込み等日程・方法：学会ホームページ，PANews，学会メール等にて後日あらためてご連絡いたします。

#### 大会事務局（問合せ先）

〒558-8585 大阪市住吉区杉本 3-3-138

大阪市立大学大学院生活科学研究科

日本生理人類学会第 73 回大会事務局

E-mail: [okada@life.osaka-cu.ac.jp](mailto:okada@life.osaka-cu.ac.jp)

TEL&FAX: 06-6605-2823



大阪市立大学学術情報総合センター（会場）



【国際会議レポート】

第 12 回国際生理人類学会議 (ICPA2015)  
開催報告

会議長 勝浦哲夫

第 12 回国際生理人類学会議 (ICPA2015) は 10 月 27 日 (火) から 30 日 (金) まで千葉市海浜幕張地区にある東京ベイ幕張ホールで無事開催することが出来ました。ここにその内容をご報告すると共に、皆様のご協力とご支援に厚く御礼申し上げます。

本国際会議は我が国での 4 回目の開催となりますが、海外 16 ヶ国からの参加者も含め 180 名ほどの参加を戴き、生理人類学の発展にとって意義のある充実した国際会議になったものと考えています。

27 日は若手研究者研究交流会、歴代 IAPA 会長記念講演会、歓迎レセプションが開催されました。若手研究者研究交流会では韓国、メキシコ、バングラデシュ、日本の若手研究者より 6 題の口演発表があり、活発な質疑が行われました。歴代 IAPA 会長記念講演会では、Hans W. Jürgens 先生から生理人類学的知見の応用に際してヒトの形態や生理機能の多様性に対する理解が重要であること、C.G.N. Mascie-Taylor 先生から疫学的研究に基づく栄養不足と貧困の問題、餓えと肥満の二つの栄養障害についてのご講演を戴きました。今回、Pavao Rudan 先生と佐藤方彦先生には体調などの理由でご参加戴けなかったのは大変残念でした。

歓迎レセプションでは、会議長の挨拶と乾杯で開宴し、その後、Semir Zeki 先生からのご挨拶、Jürgens 先生と Mascie-Taylor 先生からのお言葉を

戴き、各セッションオーガナイザーの先生方より招聘者の紹介がありました。海外からの参加者も含め歓談の輪が広がり、和やかに研究交流が行われました。

28 日は開会式の後、セッション 1 「Human Variation in Environmental Adaptation」、セッション 2 「Anthropology for Biological Locomotion」、ポスターセッション 1 に引き続き、Semir Zeki 先生による特別講演「The Experience of Beauty and its Biological Significance」が行われました。Zeki 先生のご講演では、音楽、絵画のみならず数式の美しさにも内側眼窩前頭皮質 (mOFC) が関与していることなどを、絶妙な同時通訳付きで、映像、音楽を交えて分かりやすくお話し戴きました。

29 日はセッション 4 「Human Phenotype and Genetic Variation」、IAPA 総会、セッション 5 「Human Nutrition」、ポスターセッション 2、セッション 6 「Adaptability to Lighting Environment」が行われました。IAPA 総会では次回 ICPA が 2017 年 9 月 12 日～ 15 日に英国のラフボロー大学 (会議長: Barry Bogin 教授) で開催されることが発表されました。セッション 6 の後に国際時實生理人類学賞授賞式があり、Hans W. Jürgens 先生に賞状とトロフィーが授与されました。この授賞式に佐藤方彦先生が駆けつけてくださるというサプライズがあり、会場内に拍手が自然に湧き起こりました。

授賞式の後には、弦楽四重奏の生演奏が流れる中、バンケットが始まりました。会議長挨拶、IAPA 会長安河内朗先生のご挨拶に引き続き、IAPA 副会長 Douglas E. Crews 先生のご発声により乾杯が行われました。多くの方にご参加戴き、楽しく有意

義な国際交流が図られました。最後に次期 IAPA 会長の Elena Z. Godina 先生による閉会の辞があり、バンケットは和やかに終了しました。

30日はセッション7「Adaptability to Cold Environment」、セッション8「Methodological Study of Circulation」、ポスターセッション3、セッション9「Techno-Adaptability to Modern Society」が行われました。閉会式では、Best Student Poster Awardの授賞式があり、幸運な6名の学生に賞状が渡されました。最後に実行委員長長の岩永光一先生による閉会の辞があり、本国際会議は滞りなく終了しました。その後、お台場、隅田川をめぐる屋形船ナイトクルーズがあり、海外からの参加者はもちろん日本人も東京の美しい夜景と料理を堪能されたものと思います。ナイトクルーズの最後に Mascie-Taylor 先生のカラオケ「Yesterday」が聴けたのは貴重な経験となりました。

ご尽力戴きました組織委員会、プログラム委員会、実行委員会の先生方、お手伝い戴いた学生の皆様に感謝申し上げますと共に、日本学術振興会、ブレインサイエンス財団、ちば国際コンベンションビューロー、その他多くの企業の経済的ご支援に御礼申し上げます。また、本国際会議の開催に当たり最初から最後まで的確にご対応戴きました日本旅行の寺田江梨奈氏に心より感謝致します。

### 【受賞者のことば】

第72回大会（2015/5/30～31、於・北海道大学）において優秀発表賞を受賞された方々の声をお届けします

#### 共感：集団の生理人類学

元村祐貴（国立精神・神経医療研究センター）

この度は優秀発表賞を頂き、誠に光栄にございます。学部生のころから本学会にて多くの発表を行わせていただいていた中で、この賞をとることは大きな目標でございました。気づけば博士を卒業しており、「あ、もう貰えないのかな」と思っていたところでした。頂くことができ、驚いております。

本研究はヒトの共感が相手によって変化することを示した研究で、身内（内集団）と他人（外集団）の認識が社会的認知に大きな影響を与えることを示唆するものです。ヒト脳の進化にも集団形成が大きな影響を与えたことが示唆されており、今後の脳に関わる生理人類学研究の中でも大きなトピックになるものと考えております。研究のものと着想は修士時代にご指導いただきました綿貫茂喜先生によるもので、先生の先を見据えたアイデアに畏敬の念を抱くとともに、このような素晴らしいテーマを与えていただいたことに誠に感謝いたしております。今後の研究が生理人類学の発展の一助になれば幸甚に存じております。

#### 中国の小学生の体格、栄養摂取と体力

Hao Ming（北海道大学）

この度、栄えある優秀発表賞をいただき大変光栄です。日頃からご指導いただいている北海道大学・山内太郎教授ならびに現地調査でお世話になった中国医科大学・Jia Lihong 教授に深く感謝いたします。また、調査にご協力いただいた中国遼寧省本溪市の小学生、教職員の皆様に御礼申し上げます。

本研究において都市および農村の小学生の体格、栄養摂取、体力を測定・検討したところ、都市・農村、男女を問わず、肥満および低体力が顕著にみとめられました。肥満の改善・予防のために、穀類や肉類の摂取量を減らし、果実類や乳類の摂取量を増やすこと、また縄跳びを奨励することで筋肉量の増加に繋がり、身体活動の増加が期待されることが示唆されました。今後、肥満の小学生に対して食・栄養および運動の介入を行い、肥満の改善効果を検証していきたいと考えています。

受賞を励みに、これからも精進まいりたいと思います。ありがとうございました。

#### 没頭時の脳活動を測定する

吉田一生（北海道大学病院）

この度は第72回大会優秀発表賞という栄誉ある賞を賜り、大変光栄に存じます。本研究にご協

力いただいた被験者の皆様、研究室の皆様から心から御礼申し上げます。

今回の発表では、課題中の脳血流を近赤外線分光法 (fNIRS) にて測定し、没頭状態を評価する心理尺度と脳血流との関連を検討し、ヒトが課題に没頭する際、腹外側前頭前野 (VLPFC) の活動が上昇することを報告しました。VLPFC は注意機能のコントロールを担う領域としても知られ、没頭状態時には注意機能が効率的に発揮されている可能性が示唆されました。これらの知見を応用し、より効果的な注意機能のリハビリテーションを提供できるのではないかと期待しております。

まだまだ勉強不足な点もありますが、今回の受賞を励みに、今後もより一層精進していきます。ありがとうございました。

### 寒冷曝露時の鎖骨上窩皮下組織温と 褐色脂肪活性の関係

小林功嗣 (北海道大学)

この度は第 72 回大会優秀発表賞という大変名誉な賞を頂き、まことに光栄に思います。ご指導いただいた前田享史先生、研究に協力していただいた斉藤昌之先生、米代武司先生、松下真美先生、同研究室の皆様がこの場をお借りして御礼申し上げます。

今回の発表は、緩やかな寒冷曝露を行った際の、被験者の鎖骨上窩皮下組織温と褐色脂肪活性の関係を検討したものでした。褐色脂肪活性の評価方法は、DG-PET/CT によるものと鎖骨上窩皮膚温によるものが主ですが、前者には費用と時間、後者には精度の問題があります。この研究の目的は、それらの欠点を克服する新たな指標として、皮下組織温が使用可能かどうかを検討することでした。今回の結果は、ご協力頂いた皆様のお力なしでは決して得られなかったものです。

皆様のご協力を無駄にしないためにも、今回の受賞を励みにいっそう研究に邁進していきたいと思っております。ありがとうございました。



### 【イベント報告】

#### 夏期セミナー 2015 参加記

小山冬樹 (千葉大学)

京都夏期セミナーは第 2 回の時に初めて参加し、今年で 3 回目の参加となりました。毎年同じ会場で開催されているので、会場に着いた時に「今年も来た」という感じがして、ここへ来ると、初参加の時に他の参加者や運営の方から大変あたたかく歓迎していただいたという記憶が思い起こされます。このセミナーは普段の学会にはない話題が盛りだくさんで、他大学の同世代の方とも長時間にわたって議論を交わすことができるので毎回楽しみにしています。この楽しみは、やはり合宿形式のセミナーならではの楽しみです。

1 日目 (9 月 7 日) は近赤外線分光計測法 (NIRS) の講習会から始まりました (写真 1)。NIRS は自分が所属する研究室内でも話題に上るので、以前から多少の知識はありましたが、今回は測定の仕組みといった原理的な話から聞いたことで理解がさらに深まりました。プローブ間距離は 3~4 センチくらいが良いとか、酸素化ヘモグロビン濃度は皮膚血流の影響を受けやすいので運動開始時に波形が乱れるというような実践的なことも聞けて良かったです。

夕方のポスター発表は、多くの学生参加者が自身の研究を発表して互いに議論する場となり、その中で自分も発表の機会を頂きました。私自身の研究テーマは「時間知覚」で、この学会では同じテーマの人が少ないので話を聞いてくれるか少し不安でしたが、違った研究テーマを持っている方からも興味を持って聞いてくださり、非常に嬉しかったです。質問だけではなくアドバイスや指摘も含めて色々な意見をいただき、大変参考になり、また励みになりました。このセッションでは、他



写真 1 NIRS 講習会



写真2 若手の会企画  
研究生生活の実態

大学の学生がどのような研究に取り組んでいるのかを知れて、とてもよい刺激になりました。研究室以外の方と密に情報交換ができる貴重な機会のひとつだと思います。

夜の若手の会企画「研究生生活の実態」では、現在研究者として活躍されている先生方のリアルな日常を知ることができました(写真2)。日常的にどのような生活をしているかを聞けたばかりではなく、時間を効率的に使う工夫や自分の生活にも役立つ情報が聞けて非常に勉強になりました。中でも、「機材はないのが当たり前なので実験をするためには工夫をすることが必要である」ということを聞いて、使用できる機材の範囲中で実施可能な研究を考えることもスキルのひとつだと感じました。

懇親会は前年とは異なり、会場のご厚意によりエントランスロビーを貸し切った開催となりました。研究についての議論、機材についての情報共有、プライベートな話をしたりと、楽しいひと時を過ごせました。

2日目(9月8日)の特別講演では、日本における生理人類学の始まりについての歴史的背景に関する話題や海外での研究生生活のお話など幅広いお話が聞けました(写真3)。生理人類学の始まりについては大学の講義でも勉強しましたが、今回はそれよりも詳しいお話が聞けたので、理解がより深まりました。

昼食の後、プログラムの最後として研究部会が行われました。研究部会は2つの会場に分かれて行われ、私は照明研究部会のほうに参加しました。照明研究部会では、光環境やその他の要因がヒトの身体に及ぼす影響についての講演が行われ、日々の生活に関係が深い話題だったという意味で



写真3 特別講演

も、とても興味深く聞かせて頂きました。

今年の夏期セミナーも楽しく有意義な時間を過ごさせていただきました。事務局の方々におかれましては、このセミナーを企画・運営していただき、誠にありがとうございました。また来年もぜひ参加させて頂きたいと思います。

#### 【学会動静】

##### □ 訃報

副会長として長年に渡り本学会の発展に貢献されました本学会名誉会員の菊池安行先生(千葉大学名誉教授)におかれましては、病氣療養中のところ、去る平成27年10月4日に逝去されました(享年84歳)。10月8日、9日に通夜、告別式が執り行われ、本学会からは勝浦哲夫会長他が参列し、ご香典、生花をお供えしました。ここに、謹んでお知らせするとともに、菊池安行先生のご功績とご指導に感謝し、心よりご冥福をお祈りいたします。

##### □ 大会予定

- ・第73回大会：[会期]2016/6/4,5 [会場]大阪市立大学
- ・第74回大会：[会期]2016/10/22,23 [会場]石川県文京会館

##### □ 2015年1月～9月期 新入会員の方々(敬称略)

(正)岡崎 和伸	大阪市立大学
(正)浦口 真喜	名古屋大学
(正)大井 尚行	九州大学
(正)樋口 貴広	首都大学東京
(海)Alan C.LOGAN	Harvard School of Continuing Medical Education
(正)鈴木 志保子	神奈川県立保健福祉大学
(学)小山 冬樹	千葉大学
(学)小林 功嗣	北海道大学
(学)吉田 美音	京都大学

(正)永倉 由貴	実践女子大学
(学)本田 浩祐	九州大学
(学)蓑手 なつ美	九州大学
(学)平原 楓	九州大学
(学)末松 愛理	九州大学
(正)景山 望	海上自衛隊
(学)津山 卓也	九州大学
(正)金 京室	十勝リハビリテーションセンター
(正)吉田 一生	北海道大学病院
(学)赤間 章英	千葉大学
(学)城屋敷 謙	九州大学
(正)酒向 俊治	名古屋医専
(学)岸田 文	九州大学
(正)川崎 陽子	グンゼ
(学)伊藤 尚子	群馬大学
(学)堀 麻衣	群馬大学
(学)石田 ゆき乃	群馬大学
(正)永谷 幸子	名古屋大学
(正)高柳 直人	花王
(学)郝 明	北海道大学
(学)山村 凌大	北海道大学
(学)勢田 英果	北海道大学
(海)陳 韶英	江原大学校
(海)呉 寿一	江原大学校
(海)黄 芸先	江原大学校
(海)愈 知秀	江原大学校
(海)申 恵淑	江原大学校
(正)米代 武司	北海道大学
(正)安藤 雅峻	汐田総合病院
(正)佐藤 香苗	天使大学
(正)長谷川 めぐみ	天使大学
(正)安田 俊広	福島大学
(正)大和 洋輔	藍野大学
(正)續田 尚美	同志社女子大学
(正)中島 弘貴	九州大学

※(正)：正会員，(学)：学生会員，(海)：海外会員

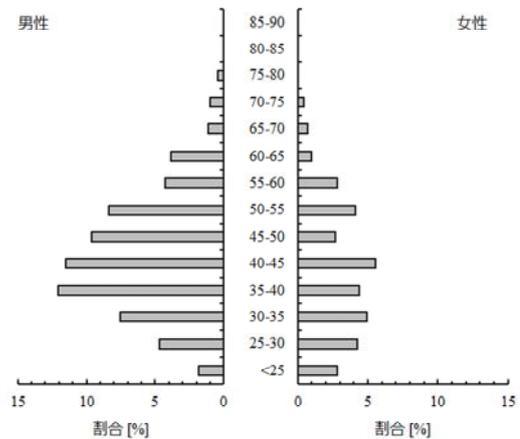
## □学会センサス ・会員人口ピラミッド

世界の人口は70億人を突破し、2080年頃には100億人を超えるのではないかと予想されています。一方、日本の人口は減少局面に入っており、2050年頃には1億人を下回る可能性が指摘されています。その背景にあるのは言うまでもなく少子“超”高齢化で、現在の日本の人口ピラミッドは幼年人口が少なく老年人口の多い「壺型」となっています。

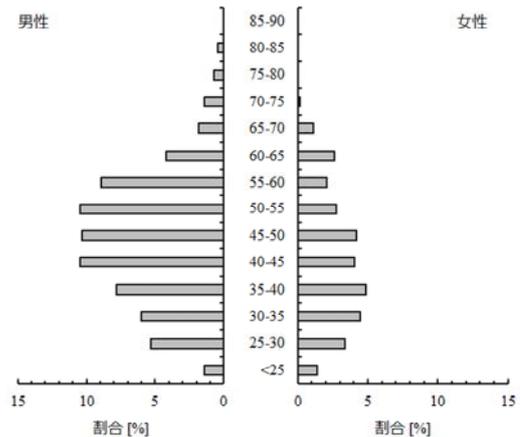
さて、日本生理人類学会の会員年齢構成はどうなっているのでしょうか。編集子はPANewsを初めて担当した2003年と、前回担当した2011年に、興味本位で会員人口ピラミッドを描いてみまし

た。それから4年が経過した2015年、三たび人口構成を調べてみました。いずれも年齢の判明している会員数に占める割合で表しています。

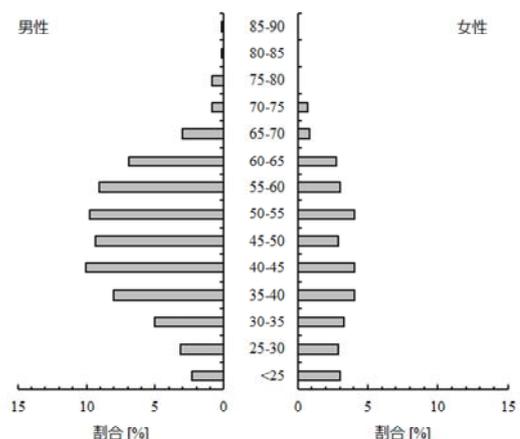
2003年



2011年



2015年



どうも順調に壺型に近づいているように見えます。2003年の形は理想的だったのかもしれませんが、30代の“生きのいい”会員の増加が望まれるところです。

次号 No.1 の原稿締切は 2016 年 2 月 1 日です

▽第 12 回国際生理人類学会議が無事に終了しました。私は福岡義之先生（同志社大学）と共に、Herman Pontzer 博士（ニューヨーク州立大学）の招聘に関わったため、大変緊張してこの会議を迎えました。Pontzer 博士の招聘に至った経緯は次の通りです。2014 年春頃、Pontzer 博士の論文を読んで手が震えるほどの衝撃を受けた私は、インターネットから Pontzer 博士のフェイスブックを探し出し、夜を徹して直立二足歩行の生物学的意義について意見交換をしたことがきっかけでした。驚くほど独創的なアイデアと創意工夫、スワヒリ語を含む 6 ヶ国語を堪能に操り、アフリカ・ハンザ族の狩猟採集生活に関する人類学的研究とラボ実験、数理モデル解析の 3 パターンを独りで切り盛りしているのだそうです。研究大国アメリカの圧倒的パワーに感動と興奮を覚えた実りある会議となりました。（安倍）

▽会員人口ピラミッドの追加情報です。平均年齢は 2003 年 43.1 歳，2011 年 45.6 歳，今年 46.7 歳で，12 年間で 3.6 歳増。年齢が判明している会員数はいずれの年も約 700 名。会員の男女比はほぼ男性 2：女性 1 で安定しており，今年の男性の平均年齢は 48.0 歳，女性は 43.8 歳。もし今 20 代後半～30 代の会員が 30 名増えれば全体の平均年齢は 44.8 歳に。（仲村）

▽PANews 編集事務局

安倍大治郎 九州産業大学 健康・スポーツ科学センター

仲村 匡司 京都大学大学院 農学研究科

メールアドレス [panews@jspa.net](mailto:panews@jspa.net)

※原稿，お問い合わせなどはこのメールアドレス宛にお送りください。